

No. 1095

海中の初夢

昭和50年、日本の夜明け、朝日の輝きがおだやかな海原に映えます。静岡県・伊豆山沖では、日本スキューバー・ダイビング・クラブの若者たちが、初夢を海中でと、冷たい海へくり出しました。

ゴムのスーツに身を包んだとはいうものの、水温15度、やはり冷たさがこたえます。しかし、そこは若者。海トサカの生い繁った岩場をテーブルにコーラで新年を祝います。海辺での酒の味はまた格別、海の仲間との語らい、話題は尽きません。広大な海を相手にダイバーたちの夢は果しなく広がってゆくようです。

スキーバス青木湖へ転落

1月1日、北アルプス山麓の青木湖スキー場に向かう満員の送迎バスが山道のカーブを曲がりきれず、33m下の青木湖に転落、のっていた62人のうち38人が自力で脱出したが、24人がバスとともに湖に沈んだ。

地元消防団や長野県警本部が捜索活動を開始、夜に入り、新潟からかけつけた潜水夫が水温3度の湖にもぐり、水面下27mの湖底に横たわるバスから遺体を収容。

しかし、暗闇の中での作業は難行し、2人の遺体を収容したあと真夜中に捜索は一旦打ち切られた。

翌朝、遺族らが見守る中捜索は開始された。正月休みに白銀の世界でスキーを楽しもうとでかけながら、今は帰らぬ人となって湖底から引きあげられ、遺体安置所に運ばれていく。変わり果てた肉身の姿に対面する遺族の悲しみが涙をさそう。皮肉にも定員をオーバーした人数と犠牲者は同数であった。父親が息子が、一人娘が孫がなぜ死なねばならなかったのか。

直接の事故原因は運転ミスだという。けれどその背景にある、過密レジャーに便乗し、客の安全を忘れた商業主義、観光開発が今度の事故を招いたといえないか。

1月2日、午後5時、水没してから30時間ぶりにバスは、湖底から引きあげられた。

“一瞬のうちに不慮の事故に会い今は帰らぬ人となられた……” 合同通夜で平和島観光(株)の小笠原社長は遺族に深々と頭を下げわびた。事故がおきて、尊い犠牲者をだしてはじめて対策がうちだされる現状が続く限り、これからも第2第3の犠牲者とその遺族の悲しみを見なければならない。